

# 角藤が新たな土壌浄化事業

建設資材販売などの角藤（長野市）は、微生物を利用して、土壌に含まれる汚染物質を分解する事業に乗り出す。対象は、油類のほか、トリクロロエチレンなどの有機化合物。汚染土壌を入れ替える従来の方法に比べてコストは二―三割程度で、環境への負荷が小さいという。工場などの土壌内から汚染物質が見つかるケースが県内でも目立つため、企業からの受注拡大を図る。

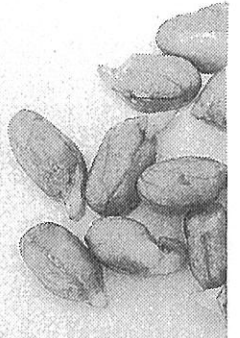
\* \* \*

新しい土壌浄化は、岐阜大などが開発した新技術を活用。浄化対象の土壌中の微生物の中から、汚染物質の分解に有用な微生物をDNA分析で特定し、その微生物が好む栄養剤を与えて活性化させ、土壌を浄化する。同社は、岐阜大が参画する環境関連ベンチャー、コンテイング・アイ（岐阜市）と業務提携した。

角藤によると、油類、トリクロロエチレン、カドミウム、ダイオキシンなどの

# 微生物で汚染物質分解

ドーマーが商品化した発芽した落花生「ピーナッツ」



同社は今後、落花生のドーマーを通じてコンビニエンスストアやスーパーなどで販売するほか、自社ブランドでの販売も予定している。価格は六十、発芽玄米で培った技術を生かして落花生の年間消費量は約

同社によると、国内の落花生の年間消費量は約

利用住宅ローン「フラット35」を、長野県内で二〇〇五年度に利用した人の特性調査をまとめた。一戸建てを新築する際に利用した人が91・7%を占め、全国平均（52・6%）を大きく上回った。残る8・3%が、マンシ

# 費用 従来方法の2-3割

有害物質の分解に有効。コストが安いのが特長で、汚染土壌を入れ替える従来方法だと土壌一トで二、三万円かかるが、新技術だと、汚染状態や地下水の状態によるものの、六千円程度で可能になるといふ。土着の微生物を利用するため環境負荷も少ないが、これまでの方法よりも比較的時間がかかる。同社は、灯油漏れが見つかった厚田生連新町病院（上水内郡信州新町）の土地浄化に新技術を導入、今月中旬に作業を始める予定。約千五百平方メートルの土地に四十八カ所の注入口（深さ三七センチ）を掘り、微生物の栄養剤を注入。約一年で元通りの土壌に戻す計画だ。

同社は〇三年から土壌浄化事業に参入。これまでは土壌の入れ替えが中心だった。久保田修一取締役土木基礎工事本部長は「微生物を使えば、土地を駐車場などに利用しながら浄化を進められる。今後は有力な浄化手段になるのではないか」としている。

# 観光誘客「信州キャンペーン」 07年実施へ 実行委設立総会



長野市で開かれた「07信州キャンペーン」実行委員会の設立総会

州キャンペーン」の実行委員会設立総会が四日、長野市内であった。キャンペーンは二〇〇七年に実施。団塊の世代の大量退職を意識し、健康や環境などをテーマにPRしていく。

実行委には、JRやバス会社、旅行者なども含めた約百団体が参加。事業では、来年のNHK大河ドラマ「同」は信州の総会も長野の功労者

関が融資した債権を同公庫が買い取り、市場で売却する仕組み。県内では、ハウスメーカー系列などのノンバンクを通じた利用が46・1%と最も多かった。地方銀行が26・3%、信用金庫・信用組合・労働金庫は合計19・2%で、ともに全国平均を上回った。

利用地域別では、長野市が21・9%、松本市が20・9%、安曇野市7・1%などだった。

同支店は「〇五年度は利用件数が前年を大きく上回っており、さらに長期固定金利のメリットをPRしたい」としている。

軽自動車は7・8%増の四千六百二十二台で、三月月連続で増加。このうち乗用は9・4%増の三千九百九十九台、貨物は4・3%増の千四百二十三台だった。

万七百三十六台で、二月連続で前年水準を下回った。軽自動車と二輪車の登録台数は前年より伸びたものの、乗用車が十二月月連続で前年水準を下回ったのが響いた。

乗用車は11・6%減の五千四百三十三台。内訳は、普通車（3ナンバー）が4・1%減の千九百四十台、小型車（5ナンバー）が15・7%減の三千三百三台だった。

恒川昌久氏を選んだ。主な決算内容は次の通り

★エプソンがスキャナーの3機種発売

セイコーエプソン（諏訪市）は四日、「GTIF700」の「写真」などスキャナーの新製品三機種を発表した。十三日から順次発売する。

いずれも逆光で撮影されたフィルムや写真を自然な色調に補正する機能を搭載。旧機種より薄型化するなどデザインを一新した。原稿カバー付け根の「ヒンジ」の改良で、分厚い書籍もスキャンしやすくなった。

「GTIF700」（オープン価格、実売想定二万円前半）は解像度四八〇〇dpi（一センチ当たり八〇〇ドット数）で、フィルムを予定して

河ドラマ「同」は信州の総会も長野の功労者

